平成28年度 学校自己評価(最終評価) (資料2) 鳥取県立鳥取盲学校

学校教育目標		視覚障がいのある児童生徒一人一人の人権を尊重し、障がいの特性等に応じた教育を推進するとともに、自立に向けた意欲の向上と知識・技能の習得を図る。 (ミッション) 視覚障がいのある児童生徒への配慮と工夫を大切にしながら、社会的自立に向けて適切な教育環境を提供する。 (キーワード)「つながる」			<ul> <li>① 学習指導の充実</li> <li>② キャリア教育の推進</li> <li>③ 人と関わり合う児童生徒の育成</li> <li>④ 視覚障がい教育の啓発と発信</li> <li>⑤ 安全・安心な環境づくり</li> </ul>				
		TO UN	年度当初			冬 評 価(1月)			
評価項目	部科•分掌	現状	日標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策  〇 長期目標(3年)達成へ向けての今年度の目標を話し	評価基準	経過・達成状況 ・授業実践と支援、児童生徒の変容、評価が一	評価	次年度への方策・ウースのでは、次年度の個別の	
	教務部	式となり、年間学習指導計画と個別の 指導計画が一体化した形での指導計 画も新たに運用が始まっている。	つつ、個別のねらいに迫る学習が展開されている。 〇 授業運営の年間の流れ(評価・変更点・課題・改善点を含む)が個別のねらいの評価とともに、指導計画の中に記録とともに残っている。	○ 技術日保(3年/建版・内) ア・ベース (30年) 日保(3日) 日本 (30年) 日	A: 指導計画・支援内容に十分改善や工夫がされている。 B: 指導計画・支援内容に改善や工夫がされている。 C: 指導計画・支援内容に一部改善や工夫がある。 D: 指導計画・支援内容への改善がない。	では、大学院と文体、元皇王にの友者、計画がつになってきた。 ・指導計画に個別の支援目標を書くことで、各単元の中で意識して指導にあたることができた。 ・評価に関わる様式が、書きやすく、見やすくなった。 ・指導計画などのデータ化が進み、作成担当者の負担は減った。	_	・個別の年間目標の検討の場を明確にし、各教科領域で、指導計画を立てるときの指針とする。 ・同に授業を担当する教科・領域の担当者がより連携を深め、担任ともデータ等を通して児童生徒の変容を共有する。	
1	教育研究部	<ul> <li>○ 視覚障がいのある児童生徒一人ひとりの特性に合わせて、ICTを含めた教材・教具の工夫をしながら授業実践を行っている。</li> <li>○ 一方、今年度10名以上の教職員の異動があった。改めて、視覚障がい教育の専門性の維持・向上への取り組みが必要な状況である。</li> </ul>	○ 教職員は視覚障がい教育の専門性向上のために研修や授業参観、実践研究に取り組んでいる。また、それらについて共有するとともに、一人一人の特性に合った指導実践に生かそうと取り組んでいる。	○ 年間を通して研修日を設定し、計画的に研修を進め、 授業実践に活かす。 ・グループ別研究:各グループのテーマを設定し、具体 的な指導方法や授業づくりについて研究を深める。 ・各種研修の改善:ICTの効果的な活用、自立活動、教 材教具、歩行など分野別に実施する。職員間での専門 性の差を活用した研修形式を計画する。 ・研修報告:グループ別研究、外部での研修、研究会で の発表研究について報告会を開き共有する。		・校内研修は年間計画に沿って、内容の充実や研修形式の改善を図り、研修の充実を進めるとともに、研究はグループで取り組んだ。・研修については100%の職員が学ぶことが多かったと答え、研究については64%の人が成果を感じたと回答した。	Α	・研究について充実させる方策を考え、より 良い研究を推進し、授業力向上につなげた い。	
学習指導の充	支援部	○ ICTを活用した学びの支援事業の3ヵ年を終え、機器は充実しており、教職員のICT活用スキルも高まってきている。今年度は、児童生徒への活用の充実が期待される。	○ 児童、生徒がICTを活用することに より、学習の効果があがり、力をつ けることができる。	○ 定期的に活用方法の提案を行ったり、ICTサポーターから助言をもらったりし、ICT機器を活用できる環境を整えることで、学習効果をあげる。	<ul> <li>《 児童生徒にアンケート実施》*口頭での聞き取りも可</li> <li>A: 児童生徒の全員がICT機器を活用することで学習効果があがったと答えている。</li> <li>B: 80%の児童生徒がICT機器を活用することで学習効果があがったと答えている。</li> <li>C: 50%の児童生徒がICT機器を活用することで学習効果があがったと答えている。</li> <li>D: 30%の児童生徒がICT機器を活用することで学習効果があがったと答えている。</li> </ul>	・児童生徒全員にアンケートをとった所、全員がICT機器を活用することで学習効果が上がったと答えた。 ・ICT機器は盲学校の学習においてなくてはならないものになっている。		・児童生徒によってICT機器の使用状況は様々である。今後もICTサポーターと協力して、児童生徒にとってよりよい活用方法を探索・開拓し、学習効果を高めていく。	
光実 .	保健理療科	方法を確立し、学習内容の理解定着を 図ることが課題である。	確立し、自主的・積極的に学習に取り組むことで、専門的知識が定着している。	<ul><li>○ 生徒の見え方や課題に応じた学習手段・方法を確立するために、授業内容・教材・指導法を工夫する。</li></ul>	上につながっている。 B: 生徒の課題に応じた適切な指導を行うことで、学習手段が確立されている。 C: 生徒の課題に応じた適切な指導を行うことで、学習手段が確立されつつある。 D: 生徒の課題に応じた適切な指導を行うことができず、学習手段が確立できなかった。 E: 生徒の課題を的確に把握できておらず、適切な指導ができていない。	・自立活動の時間や教科の学習の中で、拡大読書器の操作方法を指導したことで、学習に活用できるようになった。また、拡大読書器やプレクストークを購入するための支援を行い、自宅での学習環境が整った。・自分に合った学習方法を模索し、取り組み始めたところである。	С	・生徒の学習課題に応じた手段・方法による知識の定着を図るために、授業内容・教材の提示方法・指導法を工夫する。	
	専攻科	○ 生徒は全員が中途視覚障がい者で、 入学時には自己の見え方に合った方 法で効率的に学習する手段や方法を 持っておらず、また、確立までに長期間 を要することもある。	習手段を身につけ、適切な教材を 用いながら、見通しを持って、継続 的で効果的な学習に取り組んでい る。	○ 視覚の状況、視覚補助機器の活用技能に応じて自主 学習を効率的・効果的に行えるよう、科目担当者が共 通理解のもとに連携して適切な教材教具の提供、授業 作りを行う。 ○ 国家取得に必要な基礎的、基本的学力の育成を図る ために、小テストを頻繁に行って学習内容の定着度を 適切に把握し、これに応じた教材の変更、授業改善な ど適切な支援を連携して行う。	<ul> <li>≪ 生徒へのアンケートによる評価≫</li> <li>A: 視覚の状況、学習の状況の丁寧な確認、実態に即した教材の提供、授業の工夫が、どの科目においても十分になされ、自分に合った学習方法で効率的・効果的に基礎的・基本的知識の定着のための自主学習に取り組めている。</li> <li>B: 視覚の状況、学習の状況の丁寧な確認、実態に即した教材の提供、授業の工夫が8割以上の科目でなされ、自分に合った学習方法で効率的・効果的に基礎的・基本的知識の定着のための自主学習に概ね取り組めている。</li> <li>C: 視覚の状況、学習の状況の丁寧な確認、実態に即した教材の提供、授業の工夫が6割以上の科目でなされているが、自分に合った学習方法で基礎的・基本的知識の定着のための自主学習に取り組めていない科目が複数ある。</li> <li>D: 視覚の状況、学習の状況の丁寧な確認、実態に即した教材の提供、授業の工夫が多くの科目でなされず、自分に合った学習方法で基礎的・基本的知識の定着のための自主学習にほとんど取り組めていない。</li> </ul>	が2学期以降も全科目に広がっていない。	В	・生徒の実態、ニーズに合った授業づくりがなされているか、全科目において検証するための授業参観。研究会を設定する。	
②キャリア教育の推進	中学部		○ 盲学校卒業後の進路について、段階的に学習を進めているところである。 ・総合的な学習の時間、自立活動、作業学習を通してキャリア教育を推進しており、昨年度は職場見学や体験学習も行った。 ・校内では、「ワイワイお助け隊」として、ボランティア活動を継続して行い、活動の意義や自分の役割を理解し、意欲的に取り組んでいる。	習(活動)や情報収集を行い、盲学校卒業後の過ごし方や、就労に関して一つでも具体的なイメージを持っている。	<ul> <li>○ 作業学習や総合的な学習の時間、自立活動、学級活動、産業現場等における実習、わくわく鳥盲で、就労につながる学習を積み重ねるとともに、盲学校卒業後の進路について情報提供をおこなう。その際には、体験的学習を多く取り入れるように配慮する。</li> <li>○ 校内ボランティア活動をする中で人から感謝され、働く喜びを感じられるようにする。</li> </ul>	D: 卒業後の週こし方や別方にフなかる体験子首寺には2ん2参加できていない。	・事業所見学では見学だけでなく作業体験も計画し、事前学習に取り組んだ。体験を通じて作業の難しさ、楽しさを感じさせ、「また体験に来たい」という意欲を引き出すことができた。・校内ボランティア「わいわいお助け隊」の活動では依頼がなくても自分たちで学校のために必要なこと、困り事を考える機会を設けた。窓掃除や玄関周りの清掃などを分担して行い、感謝のことばをもらった。	В	・生徒の自己理解が進むように作業学習や体験活動に対する評価をわかりやすく伝えるともに、今後工夫すべきことや改善点を具体的に伝える。 ・校内ボランティアの活動では生徒同士がニーズについて話し合い、主体的に活動する機会を増やす。
		・しかし、校外での就労に関する体験活動はまだ少ないため、実際の場面での具体的イメージを十分につかめていない。		<ul> <li>《 単一障がい学級≫</li> <li>総合的な学習の時間や自立活動、わくわく鳥盲(職場体験)を中心に、卒業後の生活や就労について具体的イメージを持って学習できるように、ICTを活用して、具体的な映像や資料の提示したり、生活スケジュールを話し合いながら計画したりする。その際には、本人の希望や状況をもとにして、生徒と共に将来像を考えていくことを大切にする。</li> </ul>	C: 卒業後の過ごし方や就労について具体的イメージを持ち始め、進路学習や情報収集をしようとしている。 D: 卒業後の過ごし方や就労について具体的イメージが持てず、進路学習や情報収集をしていない。	交流し、生活や仕事について質問する機会を もった。事前事後には、パンフレットなど具体的 な資料をもとに、視覚障がい者の就労について 情報を知った。 ・次年度の産業現場等の実習に向け、職場調べ の学習や事業所見学を実施した。	В	・産業現場等の実習に向け、わくわく鳥盲を体験して課題となった自力通所や休憩時間の過ごし方など働くために必要となる力を身につけられるよう計画的に学習を進める。 ・卒業後の生活や働くことへのイメージが持てるよう、先輩の話を聞いたり、職場などの見学をしたりする機会を設ける。	
		○ 進路に関する情報を保護者と共有することにおいては、懇談等の機会をとらえて話し合いをしているが、各家庭によって差があり、十分には行えていない。	ついて保護者との情報交換を計画 的に行っている。	<ul><li>○ 懇談では就労に向けて育てたい力と支援について話し合う。</li><li>○ わくわく鳥盲や産業現場等における実習の様子について、保護者に見学をしてもらったり、体験後の職場懇談会に一緒に参加してもらったりして、情報を共有する。</li></ul>	参加している。 B: 子どもの進路に関する情報を興味を持って聞き、実習の見学や職場懇談会にも参加している。 C: 進路に関する情報や実習の見学、職場懇談会に参加の意思を持ち始めている。	・懇談ではわくわく鳥盲や産業現場等実習での 様子や日々の学習状況をもとに来年度の実習 先について複数のパターンを想定した話をした。 ・職場見学では保護者が生徒の作業体験を見た 上で、サービス管理者の方と将来的なことにつ いて話す機会を設けることができた。また、事業 所の所長さんを囲んで茶話会を開催し、就労に 関する様々な情報を共有することができた。		・事業所見学や説明会などによる情報提供を継続的に行うとともに、福祉サービスの利用など就労を支援する仕組みを学ぶ機会を設け、幅広い観点から生徒に合った進路選択・決定が出来るようにする。	

# 平成28年度 学校自己評価(最終評価)

(資料2)

学校教育目標		視覚障がいのある児童生徒一人一人の人権を尊重し、障がいの特性等に応じた教育を推進するとともに、自立に向けた意欲の向上と知識・技能の習得を図る。 (ミッション) 視覚障がいのある児童生徒への配慮と工夫を大切にしながら、社会的自立に向けて適切な教育環境を提供する。 (キーワード)「つながる」			① 学習指導の充実 ② キャリア教育の推進 ③ 人と関わり合う児童生徒の育成 ④ 視覚障がい教育の啓発と発信 ⑤ 安全・安心な環境づくり 最 終 評 価 (1月)				
評価項目	部科•分掌	現状	年度当初 目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策		更於 評価基準	評 1回(「月) 	評価	次年度への方策
評価 ②キャリア教育の推進	普通科			○ 生徒は卒業後の生活に必要な力を実習や学習活動を通してつける。 ○ 進路指導主事と連携し、保護者に進路情報の提供や 懇談を行い、保護者と一緒に施設見学や体験、実習を し、進路決定の資料とする。			経過・建成状況 ・促しをうけることが多いが、挨拶や教室移動、 集団での活動ができている。 ・関係機関との連携ができ、順調に進路が決定 した。	部恤 B	・集団学習の機会の保障・ ・進路の決定について早い時期から保護者、進路担当と連携して進めていく。
	専攻科	○ 職場見学・職場体験や進路情報の提供、専門家による講習会等を通じて進路意識の高揚に勤めているが、具体化が進まず、進路を意識した学習目標の設定、専門性を高めようとする取り組みにつながっていない。	○ 生徒は体験活動や生徒同士の関 わりを通して、資格取得や進路、専 門性について強く意識し、それらの 実現に向けて主体的に取り組んで いる。	家から実技を含め直接学ぶ活動、生徒同志が関わり		<ul> <li>≪ 生徒へのアンケートによる評価≫</li> <li>A: 様々な進路学習を通じて、進路目標や進路を具体化するための方策が定まり、目標達成のための活動や専門性を高める学習に主体的に取り組んでいる。</li> <li>B: さまざまな進路学習を通じて、進路目標や進路を具体化するための方策がおおむね明確になってきており、進路決定とその職の専門性を意識しながら学習に取り組んでいる。</li> <li>C: 進路目標や進路を具体化する方策を考えるための情報提供や体験活動が実施されてはいるものの、その内容や回数が十分ではなく、卒業後の進路を意識した発展的な学習にまでは至っていない。</li> <li>D: 進路目標や進路を具体化する方策を考えるための情報や体験活動が極めて不十分であり、卒業後のイメージが持てず、意欲的に学習に取り組むことができていない。</li> </ul>	で働く先輩の講和等様々な取り組みを通して、 生徒は、進路目標や進路を具体化するための 方策を概ね明確にして学習に取り組んでいる。 進路面談、進路先となる業種での職場見学の一 層の充実を求める声もある。		・進路、その専門性への意識、実践力が一層高まるための面談内容、実習体験、講和などが、より生徒のニーズに即したものになるよう工夫する。 ・理療業種の状況等進路環境の変化に即した見学・実習を、学習段階を考慮して企画、実施していく。
	キャリア教育部	<ul><li>○ 学習や生活全般にキャリア教育学習プログラムが活用されているがまだ十分とは言えない。</li></ul>	○ キャリア教育学習プログラムが児童生徒の学習や生活の指導に活用された結果、キャリア発達に関する諸能力において児童生徒の成長した様子が見られる。	<ul> <li>○ 児童生徒のキャリア発達を促すために、キャリア教育学習プログラムの各領域の視点を個別の教育支援計画に取り入れ、学期ごとの評価を行い、キャリア発達の段階を共通理解して指導する。</li> <li>○ 全職員でキャリア教育研修を行い、キャリア教育学習プログラムの効果的な活用方法を考える。</li> </ul>		A: 個別の教育支援計画に取り入れたキャリア教育学習プログラムのすべての領域で能力が向上している。 B: 個別の教育支援計画に取り入れた児童生徒のキャリア教育学習プログラムの80%の領域で能力が向上している。 C: 個別の教育支援計画に取り入れた児童生徒のキャリア教育学習プログラムの50%の領域で能力が向上しつつある。 D: 個別の教育支援計画に取り入れた児童生徒のキャリア教育学習プログラムの30%の領域で能力が向上している。	に伝え、今後の課題や指導方法を話し合い、寄宿舎生については寄宿舎指導員も含めて関係者が一体となってキャリア教育を推進した。 ・個別の教育支援計画に取り入れたキャリア教育学習プログラムは80%以上の領域で能力の	В	・キャリア教育学習プログラムの評価から児童生徒のキャリア発達における課題を明確にし、課題解決に向けて授業づくりに取り組んでいく。 ・キャリア教育研修を通じてキャリア教育の進め方や実践事例を学び、指導力の向上を図る。
③人と関わり合う児童生徒の育成	小学部	≪ 言語活動の充実≫ ○ 質問に対して答える力や、自分の思いや考えを伝えたいという意欲が高まってきた。しかし、説明不足で相手に伝わらなかったり、文章表現が限られたりする。	<ul><li>○ 相手や目的に合わせて必要な内容 を入て、分かりやすく伝えることが できる。</li></ul>	○ 学習中や帰りの会で振り返りに、国語や自立活動を中心し する。		A: 相手や目的に合わせて分かりやすく伝える力が定着している。 B: 相手や目的に合わせて分かりやすく伝える力につながっている。 C: 相手や目的に合わせて分かりやすく伝える力につながりつつある。 D: 相手や目的に合わせて分かりやすく伝える力を引き出せていない。 E: 相手や目的に合わせて分かりやすく伝える力につながっていない。	・自分の考えを発表したり、文章に書いたりしているが、分かりやすく要点をおさえたり、詳細を引き出したりする支援が必要である。 ・相手に合わせようとする姿が多くなってきているが、まだ自分中心に話をすることがある。	В	・さまざまな目的に合わせた話し方や文章 の書き方を学習する機会を設ける。 ・教師がモデルを示したり、、上手にできた時は褒めたりする。
		≪ コミュニケーション≫ ○ 友だちとの関わりを楽しみ、相手の 気持ちに寄り添う声かけが増えてき た。しかし、話をしている人の方を 見ていなかったり、答え方が分から なくて返事をしなかったりすること がある。	<ul><li>○ 相手を見て話を聞き、返事をしたり分からない時に質問をしたりすることができる。</li></ul>			A: 話を聞いて反応する力が定着している。 B: 話を聞いて反応する力につながっている。 C: 話を聞いて反応する力になりつつある。 D: 話を聞いて反応する力を引き出せていない。 E: 話を聞いて反応する力につながっていない。	・自らコミュニケーションを取ろうとする姿が多くなってきているが、状況に合わせた応答が不十分な面も見られる。	В	・児童の実態に合わせた話し方・聞き方マナーの徹底を図る。
		ねており、大きな集団の中でも臆すること無く活動できているが、会話などのや り取りに課題が見られる。	<ul><li>≪ 重複障がい学級≫</li><li>○ 自分から挨拶をしたり、友達に話しかけたりする。</li></ul>	<ul><li>状況説明をして話しかけるタの好きなことや得意なことをかけを作ったりする。</li></ul>		A: 児童が自分から挨拶をしたり、友達に話しかけたりしている。 B: 相手の声かけを受けて挨拶をしたり、友達に話しかけたりしている。 C: 教師の声かけを受けて挨拶をしたり、友達に話しかけたりしている。 D: 教師と一緒に挨拶をしたり、友達に話しかけたりしている。 E: 教師の支援を受けてもできない。	・説明を聞いて状況が分かったり、挨拶されたりすると、自分であいさつができた。 ・教師が話題を投げかけてきっかけを作ると、特定の友だちとであれば、簡単な会話のやり取りができた。	В	・友達とのやりとりに慣れるように、学習の中に友だちと会話する機会を設ける。
			<ul><li>≪ 単一障がい学級≫</li><li>○ 大きな集団の中で、自分から友達に挨拶をしたり、話しかけたりして会話を進めることができる。</li></ul>	○ 休憩や給食の時間を中心に やすくなるように、雰囲気作り 入ったりする。		A: 児童が自分から挨拶をしたり、友達に話しかけたりして会話を進めている。 B: 相手の声かけを受けて挨拶をしたり、友達に話しかけたりして会話を進めている。 C: 教師の声かけを受けて挨拶をしたり、友達に話しかけたりして会話を進めている。 D: 教師と一緒に挨拶をしたり、友達に話しかけたりして会話を進めている。 E: 教師の支援を受けても、できない。	・交流回数が増え、挨拶をしたり、話をしたり、一緒に遊んだりすることが多くなったが、まだ話せない友達もいる。	В	・引率教員が相手校の担当と相談しながら、色々な活動の場面で、意図的に会話ができるよう、きっかけを作る。
	指導部	○ 児童生徒会の企画運営には職員も深く かかわった体制で進めているが、児童 生徒会行事の企画運営に全員が参加 することが困難な場合も見られる。	○ 全ての児童生徒会行事の企画・運 営に生徒全員が参加し、主体的に 児童生徒会活動に関わることがで きている。	<ul><li>○ 児童生徒会行事に向けた話生徒同士の会話の中で行事働きかける。</li><li>○ 児童生徒会行事の運営に生う、役割を明確にする。</li></ul>	の企画立案ができるよう	A: 計画している児童生徒会行事の全てを児童生徒が自主的に企画・運営し、児童生徒 全員が行事に関わっている。 B: 計画している児童生徒会行事の8割程度を児童生徒が自主的に企画・運営し、大半 の児童生徒が行事に関わっている。 C: 計画している児童生徒会行事の半数程度を児童生徒が自主的に企画・運営し、多く の児童生徒が行事に関わっている。 D: 児童:生徒が自主的に企画・運営した児童生徒会行事がほとんどなく、児童生徒会活 動に関わった児童生徒もごく一部に限られている。	入れて企画できた。全員が企画に参加することは難しかったが、生徒全員が役割を持って取り組むことができた。	С	・児童・生徒のアイディアを引出せるようにして、全員が児童・生徒会行事の企画・運営に関われるよう、行事の担当を決めて取り組めるようにする。また、必要に応じて児童・生徒が話し合える時間の設定をする。

### 鳥取県立鳥取盲学校

### (資料2)

## 平成28年度 学校自己評価(最終評価) 鳥取県立鳥取官学校

学校	教育目標	視覚障がいのある児童生徒一人一人の人権を尊重し、障がいの特性等に応じた教育を推進するとともに、自立に向けた意欲の向上と知識・技能の習得を図る。 (ミッション) 視覚障がいのある児童生徒への配慮と工夫を大切にしながら、社会的自立に向けて適切な教育環境を提供する。 (キーワード)「つながる」			今年度の	<ul><li>① 学習指導の充実</li><li>② キャリア教育の推進</li><li>③ 人と関わり合う児童生徒の育成</li><li>④ 視覚障がい教育の啓発と発信</li><li>⑤ 安全・安心な環境づくり</li></ul>			
	年 度 当 初			最終評価(1月)					
評価項目	部科•分掌	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策		評 価 基 準	経過•達成状況	評価	次年度への方策
④視覚障がい教育	支援部	○ センター的機能の充実を推進してきたが、福祉の分野との境界線がはっきりせず学校として関係機関の要望を全て満たすことが負担になってきている。また、教職員の異動に伴い、担当するための専門性の維持が難しくなってきた。	○ センター的機能としての、目的を明確にし内容を見直すことで、合理的な運営を行い、視覚障がい教育の理解啓発が進んでいる。		での流れ等をシステム化	A: 関係機関からの要請に対してすべてシステムにそって運営できている。 B: 関係機関からの要請に対して8割はシステムにそって運営できている。 C: 関係機関からの要請に対して5割はシステムにそって運営できている。 D: 関係機関からの要請に対して3割ほどしかシステムにそって運営できなかった。	・教育相談等において、実施要項や相談の流れ を学校内外に示すことで、本校の支援内容と流 れを確立しつつある。システムが変わったこと で、以前に支援した関係機関においては、戸惑 いも生じている。 ・相談業務において、相談対象者の実態把握に 何度も電話やメールをする必要があったため、9 月より「電話等における個人相談票」を作成し、 相談先に記入してもらうことで、相談に必要な情 報を合理的に得られるようにした。	В	・教育相談を希望する機関には、相談対象者一人一人の目的や評価、終了の時期を明確にして実施することを丁寧に説明する。 ・「電話等における個人相談票」の書式を見直すとともにHPに掲載し利用しやすくする。
育の啓発と発信			<ul><li>○ 教育研究部と連携して、専門性向上を推進している。</li></ul>	<ul><li>○ 職員研修において、支援部 具・補助具・日常生活用品・ う。</li></ul>	Bに属している資料や補装 等の提供及び貸し出しを行	A: すべての職員研修(支援部が関係する)で専門性向上につながるように、工夫した資料等の準備ができている。 B: 8割の職員研修(支援部が関係する)で専門性向上につながるように、工夫した資料等の準備ができている。 C: 5割の職員研修(支援部が関係する)で専門性向上につながるように、工夫した資料等の準備ができている。 D: 3割の職員研修(支援部が関係する)で専門性向上につながるように、工夫した資料等の準備ができている。	続きの順序が事前に理解できるようひな形なども用意した。 ・貸出要請に迅速に対応できるように、教室等に 設置してある拡大読書器や盲人用安全杖を適 切に管理するとともに、管理台帳を作成した。	В	・相談室等に展示及び保管している物品の 一覧表を完成させる。
5	教務部	○ 個別の教育支援計画や指導計画、成 績処理等、教務に関する作成文書の 年間スケジュールが明示されておらず 見通しが持ちにくい状況が見られる。	○ 見通しを持って業務を進め、ゆとりを持って児童生徒の指導・支援をおこなうことにより、児童生徒が落ち着いた学校生活を送ることができる。	○ 年間スケジュール表を作成 ○ 業務の進捗状況を把握して	し、職員に提示する。	A: 年間スケジュールを作成し、見通しを持って業務が進められている。 年間スケジュールを作成し、周知されているが、見通しを持った業務が進められてい B: ない。 C: 年間スケジュールを作成したが、周知が不十分である。 D: 年間スケジュールが作成できていない。		В	・できあがった年間スケジュールと諸表簿処理の流れを、来年度は年度当初に提示する。 ・業務の進捗状況を把握し、適切な声かけを行う。
安全・安心な環境	指導部	<ul><li>○ 児童生徒の実態が多様化し、その意義を理解した上での避難訓練や安全教育をどのように行うかが課題である。</li><li>○ 安全点検をして危険な場所・物のチェックをしているが、時々生徒が転ぶなどの状況も起こっている。</li></ul>	○ 教職員は安全教育の重要性を認 識して、指導、環境整備をすること により、児童生徒が安全な生活を 意識した生活を送ることができる。	○ 日々の授業や活動、行事の に取り組むとともに、安心を む。		A: 安全を意識した指導により、児童生徒は危機回避行動が自主的に取れている。 B: 安全を意識した指導により、児童生徒は危機回避行動が取れるようになっている。 C: 安全を意識した指導により、児童生徒の行動に変化が見られつつある。 D: 安全を意識した指導に取り組むことが出来ていない。	・実際に地震が起こり、避難もスムーズに行われた。そのことから安全に対する意識も高まってきている。アンケートでも安全を意識した回答が増えてきた。	В	・今後も避難訓練の事前・事後に担任の先生から安全を意識した指導を継続していく。
境づくり	教務部	<ul><li>○ 年々、児童生徒数も減少傾向にあり、 学校生活の中で多くの人と接し、活動 する機会も限られてきている。</li><li>○ 人権が尊重された環境の中で、人との 関わりを通して自己肯定感を高め、安 心して学校生活が送れるようにしていく 必要がある。</li></ul>	○ 学校が、安心して過ごせ、学べる場となるよう、人権尊重の視点に立った環境の整備を行い、児童生徒、保護者の信頼感のもとで、学校運営を行うことができる。	員、児童生徒同士が自己在 校全体に広げていく。	字在感を高める雰囲気を学 舎内外の整理整頓など美し 」、ホームページなど学校	の学習や活動に取り組んでいる。	一人の視覚障がいの状況や特性に応じて、教 室環境の整備、教材教具の工夫や配慮等を 行った。 ・児童生徒は落ち着いて生活しているように見え るが、中には悩みや心配事を抱えている児童生	С	・児童生徒の表面的な姿のみではなく、心配事や悩みなど、心情や細かな部分もしっかりと把握し、適切に対応を行っていく。・児童生徒が心配事や悩みを伝えることができるような仕組みや教職員との人間関係の構築を構築していく。

総合評価の基準 A:十分達成 B:概ね達成 C:変化の兆し D:まだ不十分 E:目標・方策の見直し